

■ 明治15年7月 陸軍参謀本部 フランス式彩色地図



金田地区を示しています。西には金目川、東に鈴川、両河川に挟まれ、南部では両河川が近接し、地形的には、V字型の土地となっています。標高は、飯島方面が約14m。北部の「えのしろ公園」付近が約10m。V字型の先端、長瀬付近は、地域では最も低い地形となっています。

南下する金目川は、堤防で覆われ、直線的に流れ下っています。「金目川の堤防 ①」で示したこの付近の絵図にある金目川の流れとは、大いに異なっています。

今回は、金目川が筋替えされ、直線化された事情、堤防等をまとめました。

■ 現在の金目川の流れ（繰り返された破堤）

『金目川は、河床が高く、源流からの距離が短く比較的急流のため、川が曲がった個所で洪水が発生しやすく、近世には記録に残るだけでも10年に一度の割合で水害が起きました』〈金目川の博物誌〉

洪水の頻度が高く「暴れ川」といわれましたが、コメの生産には欠くことのできない農業用水として盛んに利用され、「母なる川」とも異名をとっていました。

金目川が決壊し氾濫・洪水が起ると家居は浸水し、家財・農具は流され、田畑には岩や砂礫が積もり、作物は腐り、田畑は荒廃を極めました。

■ 金目川の筋替え

- ・ 1703（元禄16）年 南関東を中心に大地震が発生し家屋の倒壊、田畑の荒廃をもたらし、その被害の規模から「元禄型の関東地震」と呼ばれています。この地震の影響で、金目川の河床が高くなったとの記録があります。

- ・ 1704（宝永元）年6月：金目川満水
 - ・ 1705（宝永2）年6月：金目川満水
- } 金目川の堤が各所で決壊・氾濫・洪水が起きました

幕府に対し、重なる水害による窮状の訴えと改善が願い出されました。

恐口上書を以奉願候御事

一 相州金目大堤并川通所々堤之儀、前々より大破之節者從御 公儀様御入用被下置御普請被仰付候、御修復之儀者、年々廿八ヶ村にて相勤候御事

一 去申ノ満水二大堤押切、其外所々堤押切申候所、御 公儀様御入用を以水止御普請被仰付、其上御料所之儀ハ田地開発金被下置難有田地二仕立申候所、又候当六月兩度之満水二所々堤押切百姓家居迄水押上、殊夜半儀有故農具等押流、雜穀くさらかし、其上田地石砂入、又者水腐二当分ら及渴命申候、三

一 此村々所々堤下二御座候故、何連之堤押切申候而も田畑損仕候、何とそ此度川通り所々堤、丈夫二御普請被仰付被下候様二奉願候、大堤之儀も兩度之満水二あやつく罷成候、是又丈夫奉願候御事

一 右之堤年々川幅せまく御座候、御見分之上、水当り之所川幅御広ク被遊被下候様二奉願候、地震以來川瀬大分高罷成、少シ之水二も堤押切申候、依此度川さらい共二被仰付被下候様二奉願候御事

・
・
・

右願奉上候通、御慈悲を以所々堤丈夫二被仰付、永々百姓助り候様二被仰付被下候ハ、難有奉存候、以上

宝永二年

平岡三郎右衛門様御代官所

『口上書』は、地域を統括する代官所の平岡三郎右衛門へ提出されました。

- 『去申ノ満水ニ而大堤押切、其外所々堤押切申候所、御 公儀様御入用を以水止御普請被仰付、』

訳：宝永元年、金目川の大堤は決壊し、所どころの堤も決壊し被害を受けましたが、幕府の事業として修復されました。

- 『当六月両度之満水ニ而所々堤押切百姓家居迄水押上、殊夜半儀有故農具等押流、雑穀くさらかし、其上田地石砂入、又者水腐ニ而当分ち及渴命申候、・・・』

訳：宝永2年6月再び決壊し、百姓の家々にまで洪水被害を受け、夜半のことで農具なども流され、雑穀は腐り田畑には石や砂がたまり、汚水がたまり、食べ物はなく命があやぶまれている

- 『此村々所々堤下ニ御座候故、』

訳：地域の村々は、堤より低いところにあるため

- 『右之堤年々川幅せまく御座候、御見分之上、水当り之所川幅御広ク被遊被下候様ニ奉願候、地震以来川瀬大分高罷成、少シ之水ニも堤押切申候、依此度川さらい共ニ被仰付被下候様ニ奉願候御事』

訳：川幅は年を重ね狭くなっています。地形などを見極めて頂き、河川が曲り流れが強く当たる所は川幅を広くして頂き、元禄の地震以来川底がだいぶ高くなり、少しの増水であっても堤が決壊してしまいます。併せて川底を深く掘り下げるようをお願いいたします。

資料が残されていないので詳細は不明ですが、幕府による現状把握（見分）がなされ、金目川は『昔八村（入野村）ノ中程ヲ斜ニ疏通シ 巽方ニテ 鈴川ニ合セシガ 屢水溢セシヲ以テ 宝永三年 命アリテ 今ノ如ク堀替レリ』と、なりました。

宝永3（1706）年2月 幕府の手により（御普請と云います）、改修が実行されました。入野、長持、南原村の間をほぼ直線的に長830間（1494m）余、川幅50～25、6間（90～24m）余りに掘り替えたもので、現在の流路となっています。

地図を見てわかりますように、飯島から長持・南原地域の間が直線で結ばれています。金目川の自然の流れではありません。田畑を人工的に掘削し川を流しました。

この筋替えの時、今日のような堤防が作られたかは不明ですが、1721（享保6）年以降に作図されたと推測される、絵図には堰（坎樋）の位置が記されています。おそらく、堤防は筋替え時に築かれたと考えられます。

・・・ 金目川は、幕府の手により今日のような流れになりました ・・・

- ・ 1707（宝永4）年 11月23日 富士山噴火（宝永の噴火）

火山灰は砂降りと表現されるように、田畑、家屋にも降り積もり、北金目地域では23～26cmほどの火山灰が積もったという記録があります。

農業用水路や金目川を流れた火山灰は、川底に堆積し排水が悪くなり『田畑の儀は申すに及ばず、百姓居家迄常々水湛え、住居なり難く』なる状況になりました。

金目川、鈴川、玉川に降った火山灰（砂降り）が合流点に堆積し、ダム状になり水が溜まり、入野、長持、豊田本郷、小嶺、宮下、平等寺、打間木の7ヶ村の田畑・家屋が浸水し、往来に船を使わねばならない状態が十年間続いたとの記録があります。

幕府は、諸河川の川渫いや金目川、玉川の筋替えを実施し、現在の川筋が完成しました。

＜金目川の博物誌、平塚学入門 「玉川の筋替え」・改＞

■ 筋替え前の金目川の流れ（成願寺の北に流れる排水路）？

成願寺付近に排水路があり、現在は小さな流れとなっていますが、筋替え直前の金目川の流れの一部といわれています。

入野村仲町の道祖神は、入野167番地の南辻、道のど真ん中に立っていたケヤキのたもとに鎮座していました。かつて、金目川が流れており、このケヤキに船を繋いでいたといわれています。金目川は東方向に流れ、入野の神社牛頭天王社付近を通り、下の宮橋付近で鈴川に合流していたと考えられています。

堀替え前の金目川の本流を考えると、この地の「字名」から金目川の流れを推測することができます。

通称オオマガリから下流にかけての字名は、「崩れ」、「上・下砂原」、「向田」、「向町」、「蛭田」、「根下」、「古屋敷」となっています。

今日残されている字名は、いずれも災害を意味する地形といわれ、牛頭天王社からは「天王道」が通り、金目川のたもとには「水神」が祀られています。「水神」を祀った天王道が、かつての金目川の流れと考えられています。

地図に目をやると、かつて、鈴川の右岸、下の宮橋付近に桑畑が広く分布しています。桑畑の立地条件は「砂地で日当たりが良い」所とされています。

付近は、かつての金目川が鈴川と合流していた地点であり、金目川の流れに運搬された砂礫が堆積した所と思われます。この付近の字名は「古屋敷」です。『昔、長持の村はここにありましたが、鈴川が氾濫するので約300年前に土地の高い西方に移転したと伝えられています』『長持村の鎮守 熊野神社、浄信寺も現在地に移りました』『入野村は宝永噴火の翌年、鈴川近くの「根下」から数軒の家が西町へ引っ越してきたと伝えてあります』

＜民俗調査報告書4＞

■ 金目川、鈴川の川幅と堤高 「新編相模国風土記稿」より

	金目川			鈴川	
	川幅	堤高		川幅	堤高
飯島村	25間2尺 (河原とも) <45m>	1丈2尺 (川除堤) <3.6m>	逆入樋 中溝堰 寺田縄へ		
寺田縄村	25間余 (川原とも) <約45m>	1丈2尺 <3.6m>		8間余 <14.4m> 板橋：11間 <19.8m>	あり
入野村	25間 <45m>	左右にあり 1丈2尺 <3.6m> 丸木橋1 10間 竹橋と唱 <18m>	堰 4か所 本堰、中堰 砂原堰、 飯島堰等	8間 <14.4m> 8間の橋2： いろし橋 平等寺橋	あり 1丈2尺 <3.6m>
長持村	20間 <36m> 板橋 13間 <23.4m>	1丈2尺 <3.6m> 1丈1尺 <3.3m> (両岸)		8間 <14.4m> 板橋 8間 <14.4m>	あり 9尺 <2.7m>
平等寺村				6間 <10.8m>	1丈(両岸) <3.0m>
豊田本郷村				6間 <10.8m>	1丈2尺 <3.6m>

<数値は 概数>

新編相模国風土記稿には、村落の記述に金目川、鈴川の川幅や堤防の高さなどが記載されています。江戸期末頃の状況です。

金目川の川幅は25間(約45m)で、堤防の高さは1丈2尺(約3.6m)

鈴川は8間(約14.4m)で、堤防は高いところで1丈2尺(約3.6m)

両河川共に高い堤防を備えていました。しかし、ひとたび、大雨が降ると曲流部分で、堤防の決壊が多発しました。近世に限らず近代でも生じ、甚大な被害を重ねました。

■ 1923（大正12）年 大正関東地震 堤防被害の惨状

金目川の堤防被害



鈴川の堤防被害



大正の関東地震による金目川、鈴川堤防の惨状です。

土砂を盛り上げ築堤された堤防は、地震の揺れに弱く、その上、地盤が液状化し盛り土は崩れ、深い地割れが生じました。堤防としての機能が失われてしまいます。

このままの状態では、金目、鈴川の両河川の水量が増すと、堤防が決壊するという被害の恐れが深まります。

■ 1938（昭和13）年 金目川の被害



（金田小学校百周年記念誌）

1938（昭和13）年、台風による甚大な被害が生じました。金目川をはじめ、この地の河川の堤防の多くが決壊し、新聞報道によると金田地区も『深さ1mの濁湖』の体を為したとありました。

写真は金目川・オオマガリ堤防と云われています。堤防は流れにより削られ、内部を見ることが出来ます。堤防本体は、大正関東地震時の築堤方法とあまり変わっていないように見て取れます。土砂を盛り上げ、固めた構造のようです。

詳細は不明ですが、堤防上に置かれた土砂入りの俵を欠損した部分に投入し修復するものと思われます。

今日の堤防本体も同様なのでしょうか？ 堤防の強度は？

金目川が決壊は、地域の「控え土手」の構築に表れています。「金目川の堤防 ①」に示してありますのでご参照ください。規模の大きな堤防でも決壊の歴史を踏み、地域の人々と金目川、鈴川の洪水との戦いが続けられました。

今日、金目川で流れが特に強く当たる部分にはコンクリート補強がされていますし、鈴川は、河川改修がされた時にコンクリートの護岸補強がなされています。

地域住民の安全安心が保たれる河川管理が望まれます。